

人と自然が共存する ニホンミツバチ養蜂

合同会社つくもらほ代表 高田陽

古くからの養蜂の島

長崎県対馬は、九州本土と朝鮮半島の間に位置し、福岡からは直線距離約一二〇キロメートルに対して、韓国プサンの釜山からは同約五〇キロメートルである。朝鮮半島に近いことからツシマヤマネコのように大陸系の生物が生息し、かつては中国大陸や朝鮮半島と日本の文化交流の玄関口でもあった。

対馬の約九割は山林であり、谷が深く入り組んだ複雑な地形をしている。古くから住民は、半農半漁の自給的な暮らしをしており、山の奥まで人々が入って、林業や山間での焼畑耕作を行っていた。そんな対馬の人々が利用してきた森の恵みの一つがニホンミツバチのハチミツである。対馬は数少ないセイヨウミツバチ養蜂をしていない地域で、ニホンミツバチのみが養蜂に利用されている。

日本の養蜂の歴史は未解明な部分が多いが、近年の研究では、一六世紀末の文禄・慶長の役けいしょうのころに朝鮮半島から養蜂技術が持ち込まれたと言われている。おそらく対馬はこの技術においてもわが国の玄関口となっていたのだろう。江戸時代に記された書物『津嶋紀畧つしまきりやく』では、（真偽は不明だが）対馬の養蜂の歴史は六世紀まで遡るとある。少なくとも江戸時代には、対馬の養蜂は盛んになっていたようである。

現在、対馬市ではニホンミツバチ養蜂が、副業や趣味として行なわれている。長崎県畜産課がとりまとめた統計によると、令和七年一月一日時点で、同市の飼育者数は二六名、飼育群数は三一九群となっている。しかし、研究者の調査によると、人口が四万一千人ほどいた平成一三年ごろは、二千人ほどの飼育者がいたとされる。ニホンミツバチ養蜂は小規模で事業化しにくいことから、昔からその大半が趣味的で、自

家消費されているため、統計からはその実態がつかみにくい。養蜂が副業的であることは、採蜜時期からもうかがえる。対馬には、スダジイなどのシイ・カシ類が優占する森が多い。そのため同類がニホンミツバチにとつての主要な蜜源だと考えられ、その花が咲く五月から六月が貯蜜のピークと推察される。しかし、対馬での採蜜は一〇月上旬に行なわれることが多い。おそらくこれは、農業・漁業・林業やシイタケ栽培などの複合的な生業の間を縫って採蜜の時期が決まったのではないかと思われる。

多くの人々が養蜂をしていたため、現在の四〇代以上の住民には、「ハチミツはもろうもの」という記憶を持つ人も多い。冬は、一升瓶にハチミツを詰め、こたつの中に入れておき、取り出して食べていたそうである。対馬では、ハチミツには薬効があるとされており、薬のように重宝されている。たとえば風邪をひいたときに、お湯にといて飲むという話は島内各地で耳にする。

対馬のハチミツは、味の濃さや風味の良さからとても美味しいと、ハチミツファンの間では有名である。他の地域であまり見られない酵母が含まれており、柑橘類のような風味をもち、一年以上経っても味が劣化しないという。ニホンミツバチについても、日本の他地域のニホンミツバチとは異なる遺伝子を持っていることが明らかになっている。つまり、対



対馬の山間部に点在するハチドウ。

馬のニホンミツバチとそのハチミツは、固有性を持つことが科学的にも示されているのである。

ミツバチに寄り添う対馬のハチカイ

一般的に養蜂業で扱うハチはセイヨウミツバチである。こ

のハチは巣箱で飼育しやすいように品種改良され、増殖も人工的に行なわれている。一方でニホンミツバチ養蜂では、野生のハチを巣箱で飼育する。そのため、ニホンミツバチたちは飼育条件が悪くなれば巣箱を放棄し、新しい営巣環境を求めて移動してしまう。繁殖や後述する「分蜂^{ぶんぽう}」もミツバチ任せで行なわれる。

対馬では、「ハチは人につく」という言葉をしばしば聞く。ハチを長年飼っている人たちは、ハチを管理するというよりも、ともに暮らしているように見える。本稿では、そんな対馬の人とミツバチの関係について取り上げたい。なお対馬では、生業としての養蜂家は

いない。そのため、以下では、対馬での養蜂をする人たちを一般的な養蜂業従事者とは分け、対馬の方言で「ハチカイ」として紹介する。

対馬で使われる巣箱は、地元で「ハチドウ（蜂洞）」と呼ばれる。いくつかの形があり、丸太をくり抜いた「マルドウ」、杉板を四枚張り合わせた「カクドウ」、カクドウを三段や六段



採蜜はミツバチに気遣いながら行なわれる。

に分割したような「重箱式」の三種類が使われている。ハチドウは、高さ七センチ、内径二一〜二四センチ程度であるが、使用される材の元々の太さや製作者によっても異なる。あるハチカイは、ハチミツの収量を増やすために、内径を大きくしたハチドウを作って試みたが、うまくいかず、元の内径に戻したという。

ハチカイたちにとって一番の楽しみは「分蜂」だ。分蜂とは、新しい女王バチが生まれて、“のれん分け”のように女王バチごとに群れが分割され、増えていくミツバチ特有の現象のことである。対馬では、三月下旬から四月末ごろが分蜂の中心時期である。その間、ハチカイたちは、毎日、ミツバチの様子や天気を観察し、巣箱の前に待機して、分蜂に備える。また、野生群の分蜂を捕まえるために、さまざまところにハチドウを置く。大岩や大木の根本に置くと捕まえやすいとされており、どうやって設置したか分からないような崖の上にもハチドウが並ぶ。

多くの蜂群^{ほうぐん}を捕まえることができると、友人に蜂群を分ける人も多い。互いに養蜂を続けられるように助け合う、セーフティネットのような関係も垣間見られる。

ニホンミツバチの個体数が減少傾向にある中、同じ群れを複数年飼育するために努力するハチカイが多い。特に採蜜の作業では、ハチカイのミツバチへの気遣いが感じられる。彼

らは、ハチドウの上から三分の一程度のところまで採蜜のために巣を切り取り、そこから下の巣はミツバチの越冬用に残す。「ニホンミツバチの一番の天敵は人だ」というハチカイもあり、ハチを大事にする価値観がうかがえる。

養蜂を脅かす課題

現在、対馬のニホンミツバチ養蜂が置かれている状況は、決して楽観視することはできない。懸念される事項は、気候変動や人為的な環境変化など多岐に渡る。

まず、地球規模の気候変動により、対馬でも植物の花期のズレや花の種数・量双方の減少が生じている。また、人口減少や後継者不足などにより山林の適切な管理が難しくなったことで、樹木の更新が滞るとともに、シカなどの獣害によって草本や低木、樹木の実生^{みしょう}が育たなくなっている。市の農林したいけ課では、その対策として、蜜源となる広葉樹が在来^{ざいらい}の苗木の植樹への補助金事業を開始しており、ニホンミツバチに限らず対馬の生態系全体の保全につながる事業といえる。

外来種や感染症による脅威も深刻である。東南アジア原産のツマアカスズメバチは、韓国経由で侵入したとされ、対馬では平成二四年にはじめて確認された。人への危害や在来昆

虫を捕食することが懸念されるため、国の特定外来生物に指定され、防除活動が現在も継続的に行なわれている。セイヨウミツバチの感染症であるサックブルード病は、従来対馬には存在しなかったが、近年では島で猛威を振るっている。この病気にニホンミツバチが感染すると、幼虫の致死率は九〇パーセント以上で、感染した群は壊滅する。

これらの外来生物や感染症には、港や空港での対策が有効と考えられるが、現在、ニホンミツバチやセイヨウミツバチの国内での移動には規制がない。島嶼の生態系は外来生物への抵抗性が低いことを前提に、ニュージーランドなどの海外ではモノや生物の移動に対する水際対策がなされている。上述のリスクや島の特異な生物多様性を鑑み、ニホンミツバチに限らず、対馬や他の離島でも同様の対策が必要だと強く感じる。

最後に、ネオニコチノイド系やグリホサート系の農薬は、ヨーロッパを中心にミツバチが集団で失踪する蜂群崩壊症候群の原因とされており、ニホンミツバチの近縁種でも同様の指摘がなされている。これを受け、対馬では、南部の豆酸地区にある豆酸みかん生産組合がネオニコチノイド系農薬の使用禁止に踏み切った。その結果、同地域ではニホンミツバチの飼育群数が増加傾向にある。国立研究開発法人農業環境技術研究所の試算によれば、ミツバチを含む昆虫による作物の受

粉の経済効果は、国内だけで四四〇〇億円、ニホンミツバチを含む野生昆虫に限っても三三〇〇億円相当とも推定されている。農業生産を支えるという点でも、農薬の利用については慎重になる必要があるのではないだろうか。

自然と共存する対馬の「アイコン」

対馬では、ニホンミツバチの美味しいハチミツのブランド化が進められている。平成一九年に設立した対馬市ニホンミツバチ部会では、ニホンミツバチの飼育方法の講習会や、ハチミツの品評会「はちみつコンクール」を開催している。品評会では糖度や味・色・香りなどが審査され、近年では毎年六〇〜八〇件の出品がある。対馬のハチミツは、地元スーパーや農協、観光物産協会などで販売され、一升二万五千円程度で取引される。その他、島外向けにもオンラインショップなどで販売が行なわれている。

ハチカイたちは、蜜源の植物や天敵など、背景にある生態系を見つめながら養蜂に取り組んでいる。ニホンミツバチ養蜂は、対馬における人と自然との関わりの「アイコン」としての価値も有しているのではないだろうか。

この点に注目した対馬博物館では、ニホンミツバチを伝統的な手法に倣って飼育し、地域の自然や郷土学習の際の題材



対馬博物館で開催されたワークショップの様様。

の一つにしている。昨年は、島内外のハチミツを食べ比べながら、味の違いと対馬の自然の関係について考えるイベントが開催された。ニホンミツバチ養蜂を通して、地元の生物多様性や自然と共存してきた人々の暮らしを学び、対馬を誇りに思う子どもたちが増えることを願うばかりである。

対馬の養蜂を間近に見ていると、身の回りにたくさん生き物がいることで島の暮らしが成り立っていることを実感し、自然に寄り添った生き方の大切さを学ぶことができる。この貴重なニホンミツバチ養蜂を、対馬の人々の身近な文化として継承させていきたい。読者の皆様も機会があれば是非、対馬のハチミツを食していただき、味を楽しむとともにその背景を思い出してもらえれば幸いである。

高田 陽（たかだ よう）

博士（農学）。学生時代に対馬市に通うようになり、大学院博士課程進学と同時に同市の地域おこし協力隊として移住。対馬のニホンミツバチと養蜂の研究で学位を取得。二〇二三年、地域の自然や文化に関する調査研究支援などを行なう「合同会社つくもらほ」を起業。自身の研究活動とともに、対馬博物館の養蜂なども支援協力。